

伊達騒動（寛文事件を中心に）

長谷川 憲 司

はじめに

江戸時代の御家騒動は有名なものだけでも10以上ある。特に、越後騒動・黒田騒動・伊達騒動を三大御家騒動と呼んでいる。

伊達騒動についての考え方

伊達騒動は寛文年間に起き、その形態は家督相続争いではなく、権力争い政治闘争であった。綱宗隠居事件から寛文事件まで、家臣団は幼君亀千代をもち立て御家を大事にするという忠誠によって、家臣一同こぞって難局に当たり、苦境を切り抜けたのである。世評では、伊達安芸宗重忠臣説、伊達兵部宗勝・原田甲斐宗輔逆臣説、原田甲斐宗輔忠臣説などがよく語られているが、当時の社会情勢、幕府の大名政策、伊達藩内部の勢力関係などを広く考察し、騒動の本質が何であったのかを明らかにすることが重要な課題である。

伽羅仙台萩などで庶民が楽しむ

(27)

長い平和の江戸時代における御家騒動に、庶民は暴露的な興味を持ち、それが小説や劇に創作され、史実とは別個の筋を面白く、複雑にするような通俗的な解釈が行われ、架空の人物も登場する。勝利者が善玉、敗北者が悪玉という構成の基本は固定しているが、その他は全く自由に見せ場が作られ、人物が創作され劇化された様々の出し物が登場した。代表的な歌舞伎としては、「伽羅仙台萩」と「実録仙台萩」である。安永六年（1777年）に「伽羅仙台萩」は奈

河亀輔が芝居に書き下し、浄瑠璃、操人形にても上演されている。「実録仙台萩」は、幕末・明治の劇作家河竹黙阿弥の作である。

伊達家六十二万石と藩祖政宗

東北の雄藩伊達家は禄高六十二万石で、江戸時代では加賀の前田家百二万石、薩摩の島津家七十二万石に次ぐ大藩であった。伊達藩

の領土は、現在の宮城県全部、岩手県の南部、福島県の一部、その他飛領の一部が加わる。仙台藩祖伊達政宗は、永禄十年（1567年）に米沢に生まれる。天正十八年（1590年）小田原城包囲中の豊臣秀吉に参謁し秀吉の臣下となり、その後本領が確定される。

居城を玉造郡岩出山に設ける。豊臣時代には主に京都や伏見で生活し、秀吉や家康をはじめ、諸大名との交際を通じて、奥州における桃山文化移植の先駆者となる。慶長五年関ヶ原合戦で徳川家康に味方し上杉景勝と戦った。戦勝により、正宗は仙台に青葉山城を建設し、城下町仙台を開府した。その後、内治と文化の振興に力を尽くし、寛永十三年（1636年）70歳で没した。

二代藩主伊達忠宗

政宗の第二子忠宗が第二代藩主となる。忠宗は、父政宗が残した実績を、着実に内容を整えていった功績は大きく、幕府にも重く用いられていた。忠宗は万治元年（1658年）に60歳で没した。

三代藩主伊達綱宗の時代

二代藩主忠宗の死を受けて、同年六男綱宗が19歳で三代藩主と

なる。忠宗の正室振姫（徳川家康の孫娘）の子ではなく、側室（公家の櫛笥氏の次女で貝姫）の子である。また、綱宗は後西天皇と従姉妹関係にあった。万治三年（1660年）7月18日に幕命により、逼塞を命じられ、品川下屋敷に隠居させられた。逼塞の原因は小石川堀の浚渫工事中に遊女通いをしていたことなどによる。

江戸小石川堀の浚渫工事と綱宗の逼塞について

江戸小石川堀の普請は、万治三年（1660年）5月に始まり、堀の長さは1200メートルもあり、寛文元年（1661年）3月に約1年で大工事が完成した。伊達綱宗は連日工事現場に行き工事を督励していたが、乱行、悪行、酒乱が酷いので、家臣が諫言したにも関わらず、また水戸の徳川頼房、老中の酒井雅楽頭忠清、親族の立花飛騨守忠茂の諫言も功を奏しなかった。その上、その風聞が世上に知れわたったので、藩の一族や老臣、さらに幕府の重臣が相談して、公儀からお咎めのないうちに隠居願いを差し出した。平重道博士の解釈によると、綱宗が藩主となつてから気が緩み、

酒癖がでてきたこと、その自由な振る舞いについて家老などの諫言を入れず、家老からも見放された形になったこと、重大な幕命による小石川堀普請という大事業を引き受けながら、世人の評判になるような遊女通いを行ったことが致命的であったようだ。仙台藩関係者は御家取り潰しの危機を意識したのであろう。当時権力を持っていた老中酒井忠清の自らの諫めも聞き入れなかったというのは、將軍の意思に反していると受けとられたのであろうとしている。

亀千代（後の伊達綱村） 四代藩主として幕府に請願

綱宗の長男で伊達藩四代藩主となる綱村（幼名、亀千代）は、万治二年（1659年）に江戸浜上屋敷で生まれる。母は側室三沢初子（振姫の次女）である。万治三年（1660年）7月、当時伊達綱宗の後見役であった立花忠茂（二代藩主忠宗の長女鍋姫の夫、筑後柳川城主）と伊達兵部宗勝（政宗の末子）は、一門・家老・宿老14名連署の全藩一致で後嗣として、亀千代家督相続の請願を幕府に提出した。

ここに幕府が伊達藩を分封しよ

うとしたとの説がある。重要な資料として家老の「茂庭家記録」の中に、幕府若年寄の久世大和守広之からの親切な助言の記録が残されている。それは老中酒井忠清の指図で、伊達六十二万石を分割する計画があり、分割は伊達宗勝に三十万石、立花忠茂の子に十五万石、田村右京宗良に三万石、片倉小十郎を旗本に取り立てるという内容である。更に、当時伊達家家老であった「奥山大学覚書」にも、伊達宗勝と立花忠茂が里見十左衛門重勝を国元への使者として派遣し、伊達家の禄高が減らされることになるかもしれないと伝えている。いわゆる伊達宗勝悪玉説である。

平重道博士はその真相について、次のように解釈している。幕府としては、綱宗を幕府の威信のために処分するが、老中の苦心は処分後伊達藩をどのように保全するかにあつたらう。家督も決定していない時、幕府としては挙藩一致で家督を推薦し、綱宗の隠居と家督相続を願い出てもらうことが大切である。このため酒井忠清が家督推薦を、重臣の立花忠成と伊達宗勝に指示したのであろう。藩がこ

の危機を乗り越える唯一の対策は全藩一致ですみやかに家督を推薦することであつたとされている。

亀千代の後見人決定

寛文三年（1663年）8月、老中酒井忠清邸で、伊達家の重臣が招かれ、幕府重臣列座のもとで、亀千代に伊達六十二万石の跡式を下さるること、亀千代が幼年なので伊達宗勝と田村宗良（忠宗の三男）を三万石の大名とし、両人が亀千代の後見人をすべきことが申し渡された。

家老茂庭周防定元と奥山大学常辰の対立

綱宗が三代藩主となった時の家老は三名であつた。茂庭周防定元、奥山大学常辰、古内肥後重安。綱宗襲封の時、茂庭定元は江戸詰家老であり、奥山常辰は国詰家老であつた。奥山常辰は茂庭定元と仲が悪く、当初伊達宗勝に取り入って、己の権勢を増大しようとしていた。奥山常辰は綱宗隠居の責任を茂庭定元の責任として弾劾し、茂庭定元を家老辞職に追い込む。

家老奥山大学常辰の専横

奥山常辰は専制体制を固め、自分の息のかかった者を末端まで役に配置した。更に、悪行を重ね、

傍若無人の振る舞いであつた。寛文三年、藩士里見重勝らが奥山常辰を弾劾して、事件が表面化し、老中の耳にも達したので、奥山常辰が罷免されている。

原田甲斐宗輔の登場

原田甲斐宗輔の家系は、譜代の家臣で宿老の家柄に属していた。奥山常辰罷免の後、寛文三年（1663年）7月に45歳で国老に任ぜられた。

四代藩主亀千代と伊達兵部宗勝の専横

寛文四年（1664年）6月、亀千代四歳の時、江戸城において將軍徳川家綱から、六十二万石の証状を賜り、亀千代の藩主たる地位が確定された。同じ年に二代藩主忠宗の娘である鍋姫の夫、立花忠茂が引退し、更に同じ年に伊達宗勝の子の東市正宗興（いものかみむねおき）が老中酒井忠清の夫人の妹と婚約し、酒井忠清と姻戚関係になったことで、伊達宗勝の権勢が強まった。

亀千代毒殺の陰謀と乳母正岡

寛文六年（1666年）亀千代八歳の時に毒殺未遂事件があつたとされている。この事件については様々な記録が残っている。「仙

台家中公事物語」、「伊達四代記」、
仙台藩の正史「治家記録」、「家蔵
記」・・・書物によつてかなり異
なる記載があるが、総合すると、
寛文六年に邸中で、ある事件があ
り、医師の河野道円親子が罪に
よつて、刎首され、奥方女中の鳥
羽と道円の婿三沢秀三がお預けに
なつたことが取り上げられている。
毒殺未遂事件は果たして存在した
か

果たして本当に毒殺未遂事件が
あつたかどうかの検証をしてみ
ると。伊達宗勝が原田宗輔と謀り、
医者河野道円を手なづけ、膳に
毒を盛らせたが、毒味役らが死亡
したため毒殺に失敗した。そこで
陰謀が発覚するのを恐れた伊達宗
勝が道円らを処罰したという説が
残っている。しかし、伊達宗勝に
は亀千代毒殺の利益がないと考え
られる。藩主に伊達宗勝がなると
は考えられない。伊達宗勝は幼君
を擁して権力を固める方が得策で
あろう。このように伊達宗勝陰謀
説も反対派によるねつ造とも考え
られることから、事件は架空であ
り、伊達宗勝の逆臣ぶりを誇張す
るために作されたものではないか
と考えられる。また、数々の芝居

の方で、この毒殺未遂事件で幼君
亀千代のあつぱれ忠義の乳母（架
空の人物）として政岡の名前が喧
伝されているが、政岡のモデルは
実は実母の三沢初子なのである。
伊達兵部宗勝の藩政掌握

寛文八年（1668年）、幕府
目付饗応時に席次問題を起こした
伊東一族への処罰で、伊達宗勝に
よる藩内支配体制が確立した。宗
勝与党の筆頭は、家老の原田宗輔
である。寛文八年頃の仙台藩政は、
伊達宗勝を中心とする原田宗輔、
渡辺金兵衛義俊（小姓頭）、今村
善太夫安長（目付）という線で掌
握され、しかもその実権は渡辺義
俊の手に帰っていた。

伊達安芸宗重（遠田郡涌谷邑主）
伊達安芸宗重（涌谷）は、亀千
代家督の時は年齢46歳で、身分
といい、賞禄といい、まさに一藩
を代表する家臣といつてよかつた。
仙台藩の慣例として、一門級の大
身武士は直接藩政には参与しない
のが慣例であつたので、伊達宗重
は、直接藩政に意見を云うことは
控えていたが、伊達宗勝の独走体
制が形成されると、これを批判す
る人々は、伊達宗重を動かそうと
考えた。

新田開発と谷地争い

寛文五年から登米伊達氏と涌谷
伊達氏の領地境界と谷地の問題が
発生する。これ以後、谷地紛争に
おける伊達式部宗倫（登米）と伊
達宗重（涌谷）の対立が激しくなる。
伊達宗倫は、二代藩主忠宗の五男
であつた。禄高は伊達宗重より低
いが、藩内における地位は、むし
る涌谷伊達を凌ぐものがあつた。
伊達安芸宗重の幕府への提訴と幕
府からの呼び出し

寛文九年（1669年）現地で
検使役による谷地検分が行われた
が、不正な裁定に伊達宗重が反発
した。伊達宗重としては、谷地配
分の依怙鼻肩を証拠に、藩政の癥
となつている目付の専横を一举に
除去しようと考え、寛文十年（1
670年）幕府目付に書面で訴え
た。その内容は、これまでの谷地
問題から話を進め、谷地分けの不
正を惹起した当代藩政の宿弊、悪
性の根源を暴露した。そうして里
見重勝跡式問題、伊東一族処罰問
題を初め、譜代歴々の者が多数処
刑され、家中の人心が動揺不安に
陥つている事実を述べ、その原因
は伊達宗勝にありと断言する。宗
勝が渡辺義俊、今村安長などの悪

人を任用しているという弾劾内容
である。上訴は幕府によつて取り
上げられ、伊達宗重は江戸に登る。
出立前には伊達一門に自己の正当
性について了解を求めている。
老中板倉内膳正重矩屋敷における
取り調べ

伊達宗重は、先に「陸奥守為之
覚書」を酒井忠清、稲葉美濃、土
井但馬、板倉重矩などの大老老中
に提出した。続いて、伊達宗重と
家老三名の取り調べが板倉重矩邸
にて行われた。そこでの原田宗輔
のあいまいな陳述は、幕府首脳を
納得させることはできなかった。
大老酒井忠清屋敷での刃傷

寛文十一年（1671年）3月
27日、伊達宗重及び家老三名の
取り調べが酒井忠清邸にて行われ
た。当日酒井忠清屋敷には、大老
酒井忠清、老中稲葉正則、久世広
之、土屋数直、板倉重矩の全員、
申次町奉行島田守政、作事奉行大
井正直、大目付大岡忠勝、目付宮
崎憑仲（よりなか）など関係者全
員が参集していたので、これで事
件の大詰め、裁断が下る日である
ことが明らかであつた。
取り調べは宗重↓柴田↓原田↓
古内の順に1人ずつ呼び出され、

更に、宗重↓柴田↓古内と2回目の尋問が予定されていた。原田宗輔が退出し、古内義如が入れ代わって奥に入っていた後に、原田宗輔の刃傷事件が発生した。

原田甲斐宗輔の刃傷と伊達安芸宗重の落命

原田宗輔は60cmの脇差しを抜いて、「おのれめ故と詞をかけ」、伊達宗重の頸元を切りつけ、そのまま奥の方へ進んで行ったので、家老柴田朝意が一大事と背後から原田宗輔の肩を斬ったが、原田は初めから覚悟していたようので下にさね帷子を着ていたので、原田はとって返し柴田の額を斬った。そこに伊達家聞番の蜂屋六左衛門が駆けつけ、原田を後から斬りつけ、組み付いて脇腹を刺した。原田宗輔はそこで力尽きたようである。同時に柴田朝意と蜂屋六左衛門も混乱した酒井家の家臣に斬られて死亡した。

原田甲斐宗輔刃傷の原因

原田宗輔の刃傷の原因として、乱心説が挙げられている。原田宗輔は、家老同士の誓約に賛成しなかったこと、伊東事件や席次問題など、特に直接彼に関係した事件であったが、尋問の進行に伴い、家老の柴田や古内はありのままの事実を述べたが、原田甲斐は伊達宗勝一派であり、宗勝一派の政治責任を一手に引き受けるような立場に追い詰められて、これは原田宗輔にとつて実に割に合わない役割であった。ここで土壇場に立たされた甲斐が、進退きわまって逆上し、刃傷に及んだとなれば説明はつく。宗輔は気の弱い神経質な男であったから、ずるずると宗勝や渡辺義俊らに誘い込まれ、最終に全責任を押しつけられ自滅したとする説。

別の解釈では、本当に乱心したのかという説もある。原田宗輔は茂庭家とのゆかりで家老となっており、初めは反宗勝の立場であった。しかし、両後見の歩調が一致せず、家老内部でも古内義如が田村宗良派で、筆頭家老の原田宗輔が反宗勝派に属すれば、大騒動になる危険があったので、あえて宗勝に歩調を合わせるより他はなかったであろう。原田宗輔としてはしばらく忍耐して藩をバラバラにせず、主君の成長を待って、伊達宗重の谷地紛争を解決しようと考えていたが、伊達宗重は主君がまだ若年であるのに、騒動を幕府に訴え出たので、伊達宗重に「汝故なんじゆえ」と叫んで伊達宗重に斬りかかり、更に奥に進んで、伊達宗重と呼吸を合わせていた老中の板倉重矩に物申そうとしたのではないかという説である。いずれの説をとるにしても、世評では伊達安芸宗重は忠臣もの、原田甲斐宗輔は悪人と決めつけられている。

刃傷事件と酒井忠清

酒井忠清はいち早く伊達安芸宗重を忠節の線でもとめようとした。本来ならこのような事件は藩主の責任となるところであったが、酒井家が負傷者を手厚く取り扱ったのは、伊達家に対する極めて温情ある態度であった。世間では、酒井忠清と伊達宗勝が親戚関係にあったことから、このような事件を引きおこした責任を問う声があったが、酒井忠清の態度をみると、終始公正中立で、伊達家の存続を第一に考えており、宗勝一派に依怙愚慮したのではないと考えられる。むしろ忠清を利用しようとしたのは、伊達宗勝である。また、事件後の伊達宗勝への処置が予想以上に厳しかったのは、こうした取りざたを打ち消す意味が含まれているのかも知れない。

伊達兵部宗勝一派と原田甲斐宗輔一族の処分

寛文十一年4月になり、処分が決まる。伊達宗勝は松平土佐守にお預け、田村宗良は閉門、宗勝の子東市正宗興は小笠原遠江守へお預けとなった。この事件で仙台藩宿老家として名譽ある家柄を誇った原田家は滅亡した。息子4名は切腹、甲斐の嫡子帯刀宗誠の子は殺され、母・妻なども全員他所へ預けられた。

伊達六十二万石安泰の申渡

寛文十一年4月、伊達綱基(幼名、亀千代/延宝五年18才で綱村に改名)が江戸城に登城した。大老、老中から伊達家の安泰が申し渡された。

伊達騒動とは、果たしてどのような事件であったか

藩内の権力闘争であり、十数年来の事件であるから、単純に善悪をつけることは難しい。

三代藩主綱宗時代、綱宗は年少であったので、家老に対する統制力は弱かった。時の家老は、茂庭定元、奥山常辰など前代から引き続いた実力者が控えていたので、若い綱宗は手も足もでなかった。

そこで、綱宗は近臣者を近づけ、遊興にふけるようになった。家老や重臣は綱宗のわがままな行動を見限り、藩主をもち立てていこうという意志が欠如していた。そこで、綱宗は数名の近臣とともに詰め腹を切らされた形となった。

● 亀千代時代、藩主の支配力はなくなり、勢力図が変わった。後見になった政宗の子伊達兵部宗勝及び忠宗の子田村右京宗良の連枝。一門では、伊達安芸宗重、家老では茂庭定元と奥山常辰が対立し、他の宿老や家老もどちらかに味方した。このように、藩内の勢力が

派閥的に分裂してきたから、これを藩主の後見人、代行者が統括していくことは困難であった。このようなところに伊達騒動が発生する要因があった。

● 伊達騒動（寛文事件）における伊達兵部宗勝の責任、自分の勢力を拡大したいという私欲があり、性格的にも好悪愛憎が激しく、私党を作り易い欠点があった。従って、政治の進め方も、大局を見渡しながら、勢力の均衡を計って推進するという賢明さがなく、茂庭定元を理由もなく退けたり、奥山常辰を信用しすぎて専横を許した

り、奥山常辰の失敗に懲りると、今度は極端な家老無視の腹心政治を行い、藩内の反感を買ったり、青年の田村宗良との調和に失敗したり、彼の政治には一貫した理想がなく、独善的に腹心政治、目付政治を行った。

参考図書

大槻文彦「伊達騒動実録」

吉川弘文館

山本周五郎「樞ノ木は残った」

新潮社

平重道「仙台藩の歴史」2

「伊達騒動」 宝文堂